

摂食嚥下リハビリテーションにおいて歯科が果たす役割

新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食嚥下リハビリテーション学分野教授
井上 誠

本講演では、嚥下障害をテーマとして、要介護高齢者や嚥下障害者の在宅診療に焦点を当てながらも、摂食嚥下機能の基礎を考えることがいかに大切かという点についてもお話しさせていただきたいと思います。要介護高齢者の増加とともに摂食嚥下障害の問題もまたメディアなどに取り上げられる機会が増えています。臨床現場では「口から食べることを取り戻せる患者さんも多数いらっしゃいますが、そのためには、スーパードクターなる存在の必要はありません。

歯科が摂食嚥下リハビリテーションに関わるきっかけを作ったのは、口腔ケア実践による肺炎予防への貢献にあります。口腔ケアの主たる目的が、口腔内の衛生状態の改善にあることはいままでありませんが、口腔ケアがもたらす身体機能へのアプローチの意味について考えます。さらに、摂食嚥下障害の臨床に対する歯科医療の一番の貢献は、何といても咀嚼機能回復へのアプローチです。歯科治療による咬合の維持回復が、ことに摂食機能の低下した高齢者にとっても重要です。

歯科医の摂食嚥下リハビリテーションへの介入状況に関する全国の流れを追ってみると、疾患に基づく正確な診断と介入内容の決定と実行に関する技術や知識の問題、多職種連携を進める中で歯科医の役割を明確にして責任のある介入を継続するためのネットワーク作りの困難さなどがあげられています。摂食嚥下障害に従事する臨床家の責務は、人が人らしく生きていくための大きな要素である「口から食べる」ことを支えること、誤嚥性肺炎を予防することです。私が所属しているのは大学病院です。そこには医師、歯科医師、看護師、歯科衛生士、療法士、栄養士など多くの職種が集うことで、各々の専門分野の力を有効に生かした臨床が進められています。翻って、地域ではどうでしょうか。これらの担い手はどなたでしょうか。施設や在宅において摂食嚥下障害の臨床を担う中心は歯科でなければいけないとの声もあるようですが、歯科医と歯科衛生士が真に何をすべきか一緒に考えましょう。

【講師略歴】

井上 誠



1994年 3月 新潟大学歯学部 卒業
1998年 3月 新潟大学大学院 修了
1998年 4月 新潟大学歯学部 助手
1999年12月～2001年11月 英国レスター大学 留学（リサーチフェロー）
2004年 9月 新潟大学医歯学総合病院 講師
2006年10月 新潟大学大学院医歯学総合研究科 助教授
2008年 4月 同 教授
現在に至る

林 宏和



2007年 3月 日本歯科大学新潟生命歯学部卒業
2008年 3月 歯科医師臨床研修修了（新潟大学医歯学総合病院 加齢歯科診療室）
2012年 3月 新潟大学大学院医歯学総合研究科
摂食嚥下リハビリテーション学分野 博士課程修了
2012年～2016年3月 新潟大学医歯学総合病院 口腔リハビリテーション科 医員
2016年 4月 医療法人 林歯科医院勤務
2017年 5月 大成学院大学歯科衛生専門学校 非常勤講師
（摂食嚥下リハビリテーション）
現在に至る